

構文と焦点連鎖構造による談話分析： 認知言語学と英語教育の観点から

岩崎 真哉*

A Constructional and Focus Chain Analysis of Discourse: From the Viewpoint of Cognitive Linguistics and English Education

Shin-ya Iwasaki*

Abstract

In this article, firstly, it is shown that discourse which appears in the Reading Section of *TOEIC*[®] L & R is analyzed within the framework of Cognitive Linguistics and Construction Grammar. Secondly, the notion of Focus Chain is presented and it is argued that it is useful in understanding and teaching the structure of its discourse. Finally, it is indicated that the present study is compatible with the goals and objectives of J-POSTLE and could contribute to English education.

キーワード

認知言語学、構文、焦点連鎖、J-POSTLE

I はじめに

本稿では、認知言語学の枠組みで、談話の流れを Langacker (1999) の焦点連鎖 (focus chain) の概念を使って分析する。具体的には、談話がどのように構成されているかを、焦点連鎖の図を用いながら分析していく。分析の際には、談話を構成する要素に注目し、それを「構文」と見なしていく。本稿では、「形式と意味のペアをなすもの」として構文を考えていく (Goldberg 2006, Hilpert 2014)。

本稿の目的は次の3つである。第1に、本稿では、*TOEIC*[®] Listening & Reading Test (以下、*TOEIC*[®] L & R) 形式の問題の一部の談話を利用するが、これは昨今の日本の大学英語教育ではそのスコアアップに対する授業法が重要視されることがあるからである。そのため、本稿では、その教授法の一つを提示することを一つの目標とする。第2に、そ

* いわさき しんや：大阪国際大学国際教養学部准教授 (2017. 9. 21 受理)

の TOEIC® L & R の一部の問題に出題される談話の教授に認知言語学の手法が有効であることを示すことである。そして、第3に、『言語教師のポートフォリオ』（以下、J-POSTLE）で提示された目標に、本稿の手法が合致することを示すことである。

本稿の構成は以下のとおりである。次節で、認知言語学とはどのような理論であるか、概説する。3節では、J-POSTLE の内容について、本稿が関係する部分を紹介する。4節では、具体的に本稿の分析を提示し、問題文を見ながら議論する。そして最後に、5節で結語を述べる。

Ⅱ 認知言語学とは

本稿は認知言語学の枠組みで分析を行っていく。認知言語学とは、我々ヒトの認知プロセスに注目して言語現象を説明していこうとする分野であり、語やモノは概念化の反映であると考え（Langacker 1987, 1999）。¹⁾ また、ある表現の意味が直接的な状況以外にも影響されるという立場をとる。言い換えると、表現の理解には、百科事典的知識が関与するということであり、さらには、言語構造は一般的な認知能力（例えば、知覚やカテゴリー化等）と切り離すことはできない、と考える。

また、統語構造は人間の事態把握の結果であるとし、言語によって事態把握は共通する部分もあれば、異なる部分も当然あると考え、その結果、認知スタイルも言語によって異なると考える。

本稿では、特に談話を取り上げるが、談話は「言語使用のさまざまな具体事例から構成された、一連の言語使用イベント（usage events）から成り立っている」（ラネカー 2011: 605）。²⁾ 特に談話では進行中の文脈が大きく関わり、上述した言語外知識や認知能力も関係する。談話是对話者間の相互作用で成り立っており、社会文化的規範にも影響される。

対話者間の相互作用というのは、言い換えると、対話者によって発言された内容（先行文脈）とこれから発言される内容（後続文脈）が、相互に期待されるということである。例えば、once upon a time があると、何か昔話が始まると期待される。一方で、lived happily ever after という表現は昔話の終わりを表すような働きがある（ラネカー 2011: 610）。ラネカーは前者を予期的（prospective）、後者を遡及的（retrospective）と呼ぶ。何かしら後続することを示す表現の例として、and so, therefore, nevertheless, at the same time も挙げているが、これらは遡及的な働きもする。

以上の議論をまとめると下図になる。

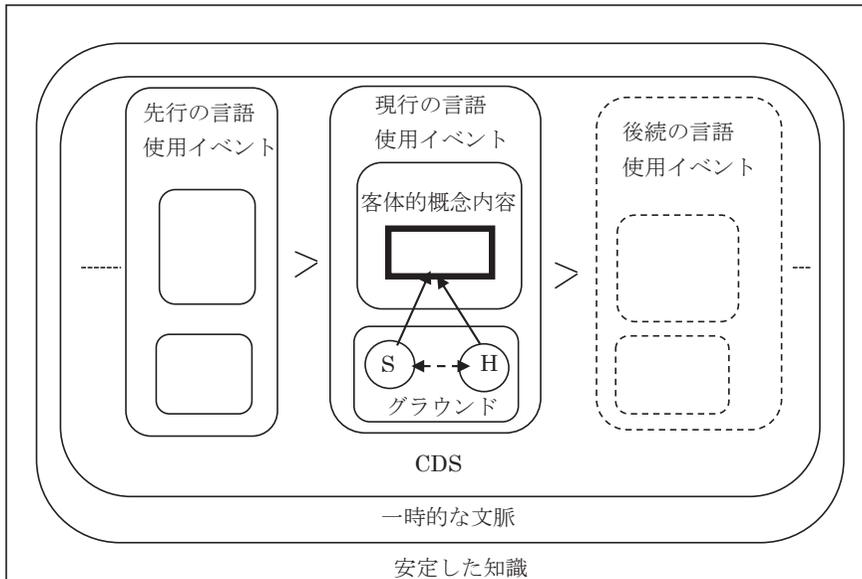


図1 談話構造

(ラネカー 2011: 619)

談話は話者 (speaker: S) と聞き手 (hearer: H) に共通に認識される文脈 (現行談話スペース、current discourse space: CDS) に基づいて進行していく。現行の会話は当然、開始の談話でない限り先行談話があり、最後の談話でない限り、後続する談話がある。談話は以上のようなモデルで記述されるのである。

本稿で TOEIC[®] L & R 形式の一部の問題を分析事例として取り上げていくが、そこで重要視したいのが「構文」という概念である。「構文」は「形式と意味のペアをなすもの」と上述したが、本稿では、後述する「テキストメッセージ」や「電子メール」文も、広い意味で構文を成すと考える。ここで述べていることは、「フレーム意味論」の「フレーム」の概念とも重なるところがある。フレーム意味論とは、「語の意味は、それを理解するのに前提とされる概念を構成する経験や信念等の構造化された背景を参照してのみ理解される (Fillmore 1982)。例えば、商取引の状況を考えると、商取引には品物があり、売り手と買い手がお金を用いて取引をする。「買う」(buy) という行為は、「買い手と品物」に言及することになり、「売る」(sell) という行為は、「売り手と品物」に言及することになる。それぞれ直接言及するもの以外は背景知識となっている (Fillmore 1977)。本稿では、あるフレームの中では特徴的な表現が使用されるという意味で、それも「形式と意味のペアをなす」ということから、フレームも一つの大きな構文として考えていく。

Ⅲ J-POSTLE とは

具体的な談話構造分析を始める前に、本節では、談話を教授する方法を示す際に利用される J-POSTLE について簡単に説明する。

J-POSTLE (『言語教師のポートフォリオ』) とは、JACET 教育問題研究会が EPOSTL 「ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ」 (the European Portfolio for Student Teachers of Languages) を翻訳・編集したものである。具体的には、日本の言語教育環境に合うように翻案化し、英語教職課程の履修生と現職英語教師が学んでいることや実践していることを記録し、「自分の成長に役立てるもの」である。また、「成長を記録し振り返ることで、自己の長所や改善点に気づき、指導方法 (あるいは教職) に対する気づきや学びが促され」ることを目標としている (p. 5)。特に、EPOSTL の優れたところとして、次の点が強調されている。

・行動志向の言語観 (Action-oriented view of language) :

「言語教育は、場面・概念・機能シラバスによる、人同士の交流 (インタラクション) を中心としたコミュニケーション型指導法 (CLT) が理想的な教授法」

・生涯学習 (Life-long learning) :

「自分の意思で英語の学習を始め、学習の管理ができる自律した学習者になること。そして、英語の学習は役に立ち生涯を豊かなものにするという実用感覚を一生持ち続けること。こういった長期的な目標を持てるようになること」

(p. 1)

本稿では、本稿の分析方法が、J-POSTLE の観点から英語教育に有益であると主張する。

Ⅳ 分析

談話は文と文をつないでいくことで構成されていく。節と節をつなぐには、典型的には接続詞があるが、談話をつなぐには、それ以外にも、副詞や名詞、あるいは複数の語 (句) を組み合わせることで談話をつなげていくことになる。大竹 (2016) が述べるように、談話は聞き手の理解に負担をかけないように配慮されて、構成されていく。自然な談話に文をつなげ、統一性を生み出すことは結束性 (cohesion) と呼ばれ (Halliday and Hasan 1976)、結束性を高めるにはいくつかの方略があることが指摘されている。

特に談話是对話者によるやり取りによって形成されることが強調される。具体的には、対話の理解には、コンテキストの背景知識が必要とされる場合がある。次の例を見てみよう。

A : Are you gonna be here for ten minutes?

B : Go ahead and take your break. Take longer if you want to.

A : I'll just be outside on the porch. Call me if you need me.

B : O.K., don't worry.

(ガンパーズ 2004 : 2)

第1文のAの質問は、イエスかノーで答えるような質問であるが、Bは「提案」という形で答えている。このやり取りが成立するのは、例えば、この会話がオフィスで行われており、二人の間で休憩をとることが了解されている（どちらかはオフィスにいないといけない）というような背景知識が二人に共有されている状況である。この例から会話が推論によって行われる場合があることがわかる。

このことは本稿の分析では、ラネカーの焦点連鎖の構造から説明されるが、それは、参照点構造を複合的に連続したものと捉えられる。参照点構造は次の図で表される。

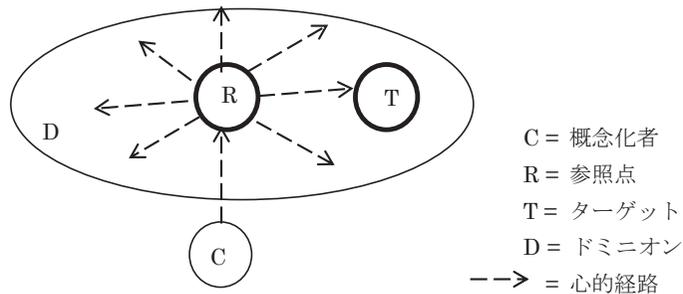


図2 参照点構造

(ラネカー 2011: 109)

我々ヒトは、あるもの (T) を指示したい場合に、より目立つもの (参照点:R) を経由して目標物であるターゲットにアクセスすることがある。ある参照点は、他のターゲットにもアクセスする可能性があるため、図では複数の矢印で示され、それらがドミニオン (D) を構成する。

Langacker は上記の参照点構造を利用し、焦点連鎖を提案する。Langacker (1999:365) によれば、焦点連鎖とは、概略、「ある文脈で生じる一連の注意の焦点の連続」のことであり、「ある一つの文脈で、特定の焦点に注意を向けることは、環境を変化させ、次の焦点が見つけられる範囲内で新しい文脈を喚起する」ことであると定義される。言い換えると、これは参照点構造が連続したものであると考えられる。焦点連鎖は図3で示される。

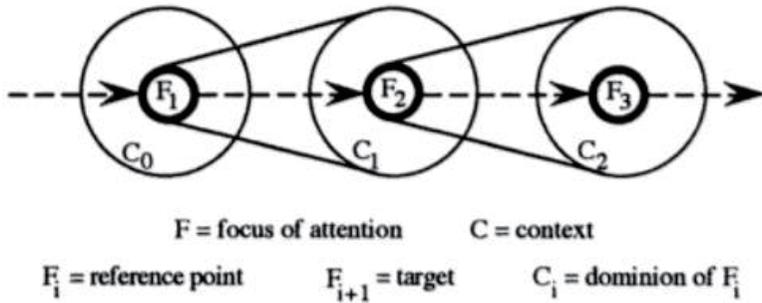


図3 焦点連鎖

(Langacker 1999 : 365)

F は注意の焦点を表し、C は文脈（参照点構造ではドミニオン（領域））を表す。F は参照点となり、次の右側の F をターゲットとする。破線矢印で焦点が順に変化していることが表される。例えば、 F_1 が始めの注意の焦点となり、新しい文脈 C_1 を喚起する。次に、その C_1 内で注意の焦点 F_2 が喚起される。そして文脈 C_2 内で次の注意の焦点 F_3 が概念化される、というものである。

では具体的に談話を分析していく。

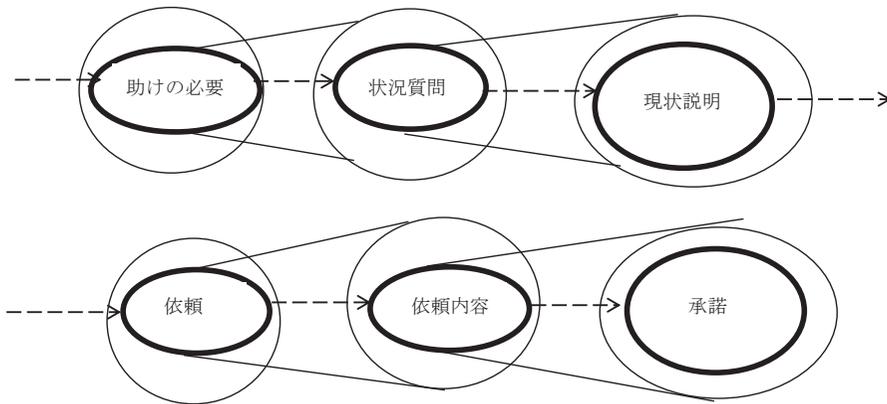


図4 テキストメッセージ I の焦点構造

- ① Tomoko Ishimoto: Sarah, I need some help.
- ② Sarah Hunter: What's wrong?
- ③ Tomoko Ishimoto: I'm going to be late for work today because I'm waiting for the babysitter for my son. She's supposed to....., but she's late. Can you do me a favor?
- ④ Sarah Hunter: Sure, what do you need?

- ⑤ Tomoko Ishimoto: I'm supposed to meet a client, Mr. Tanaka, at 11 A.M. But I don't think I'm going to get to work on time. Would you mind meeting him for me?
- ⑥ Sarah Hunter: Okay, sure. Do I need to know anything in particular?
- ⑦ Tomoko Ishimoto: No, just meet him at the office and treat him like a regular client.
- ⑧ Sarah Hunter: I got it.
- ⑨ Tomoko Ishimoto: Thank you!

(テキストメッセージ I、ヒルキ&セイン 2016: 113 の一部)

第1メッセージで、Tomoko Ishimoto 氏はメッセージの受け取り手である Sarah Hunter 氏に助けを求め、第2メッセージで、Hunter 氏は「何かあったのか」と質問する。第3メッセージで、Ishimoto 氏は自分の置かれた状況を説明し、お願いがあることを述べる。そして、第5メッセージで具体的な依頼内容を伝え、Hunter 氏は依頼に対して承諾している。ここには「依頼」→「承諾」という構造が見られ、依頼表現としては、Can you do me a favor? や Would you mind ~ が、承諾表現としては、Sure や Okay などが使用されている。

もう一つ別のテキストメッセージの構造を考えてみよう。それは「飛行機の遅延」を同僚に告げるテキストメッセージであるが、構造は上記とほぼ同じであるので、メッセージ内容の詳細は省略する。⁴⁾

テキストメッセージでは、まず、飛行機が遅延し、乗継便に乗り遅れたという「現状」が報告される。次に、新たな到着予定時刻が告げられ、それに対し、状況確認の質問がなされる。ここで重要であるのは、Would you mind ~ のような依頼表現が用いられ、その回答として、“Sure thing.” が用いられていることである。この構造でも、OK や Sure thing のような承諾の表現が用いられ、「依頼」→「承諾」という形で談話が進み、それぞれが構文を成していると言えるのである。⁵⁾

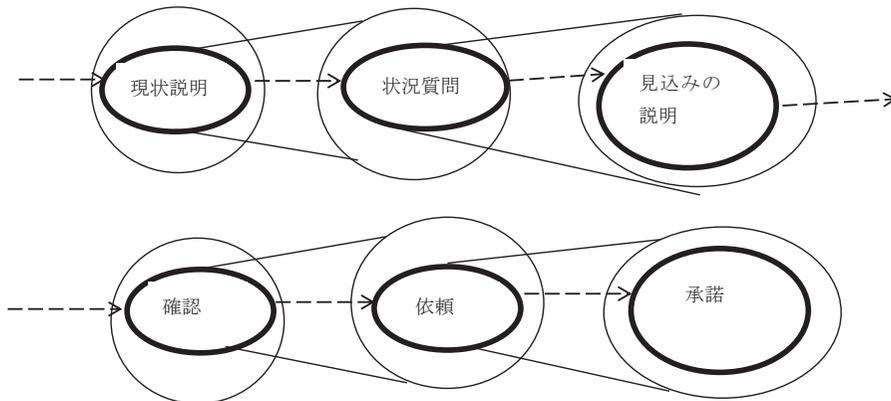


図5 テキストメッセージ II の焦点構造

テキストメッセージ問題に類似した問題として、オンライン・チャットの話し合いの問題があり、時には、登場人物が3人以上の場合もある。以下のオンライン・チャットの話し合いの問題を見てみよう。

- ① Bruce Byrd: We usually have two staff members at the concession stand during film screening, but this appears to not be enough as we wind up with a long line of customers, so I want to avoid this. Can anybody work the concession stand from either 10:00 A.M. or 4:00 P.M.?
- ② Kristina Wheeler: I am able to work at 10:00 but....., so I won't be able to work the 4:00 P.M. shift.
- ③ Minnie Chambers: I will have to rearrange my schedule, but I could probably work from 4:00 P.M. Can I work this shift instead of my weekend shift? There's a concert that I want to go to.
- ④ Bruce Byrd: If you can get someone to take your shift on the weekend, then that will be fine, Minnie. Kristina have you worked at the concession stand before?
- ⑤ Kristina Wheeler: No, I haven't. I've only worked at the ticket booth.
- ⑥ Bruce Byrd: OK. I wasn't sure if you have since you are new here. I'll be there to train you then.
- ⑦ Kristina Wheeler: Sounds good. I'll see you then.
- ⑧ Minnie Chambers: Nick said he is willing to take my shift on the weekend, but I'll have to confirm with him first.
- ⑨ Bruce Byrd: Works for me Minnie. Enjoy the concert.

(オンライン・チャット、ヒルキ&セイン 2016 : 122 の一部)

第1メッセージで、Bruce Byrd氏は10:00 A.M.と4:00 P.M.に働ける人がいるか「質問」している。第2メッセージで、Kristina Wheeler氏(図ではK.W.)は、10:00はOKであると述べている。第3メッセージで、Minnie Chambers氏(図ではM.C.)は、4:00 P.M.はOKであろうが、週末のシフトの変更を依頼している。第4メッセージで、Byrd氏は、2人に対して返答している。Chambers氏には、シフトを代わってくれる人がいればOKであるし、Wheeler氏には業務経験を「質問」している。第5メッセージでWheeler氏は未経験であると「回答」し、第6メッセージでByrd氏はそれに返答する。第8メッセージでChambers氏はシフト交代者がいたことを告げ、第9メッセージでByrd氏が承諾する。このように登場人物が3人の場合は、上述の登場人物が2人のテキストメッセージの場合と少し異なっているが、「依頼」→「承諾」という構造は基本的に変わっていない。違いは、その構造が2方向に及んでいることである。

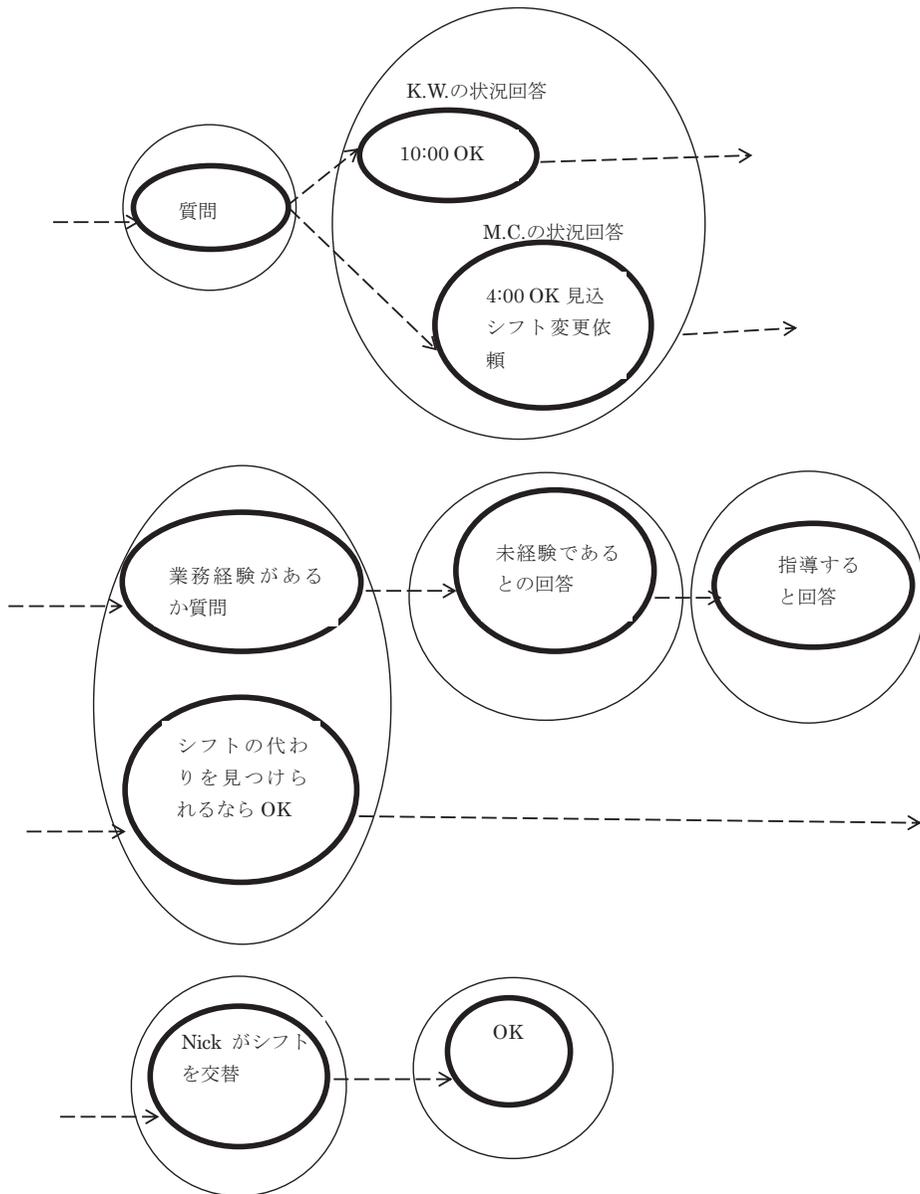


図6 オンライン・チャットの焦点構造

次に、本稿の分析が対話だけでなく電子メール文にも適用可能であることを見る。

Thanks for your excellent work again this year. The slight downturn in sales has been nationwide, so I hope that you and the staff at the Strathpine store don't worry

too much about it. Nevertheless, it is important that we do all we can to remedy the situation. Please open the attached form, fill it in, and return it to me by Wednesday. I am looking for input from regional store managers about ways we can encourage more sales. I want you to include such data when you fill out the form I have supplied.

In addition, I would like to hear your take on the problem we are experiencing and any suggestions you might have.

I look forward to hearing back from you.

(リーディングセクション Part 6: 電子メール、『TOEIC 究極のゼミパート7』 p.168 の一部)

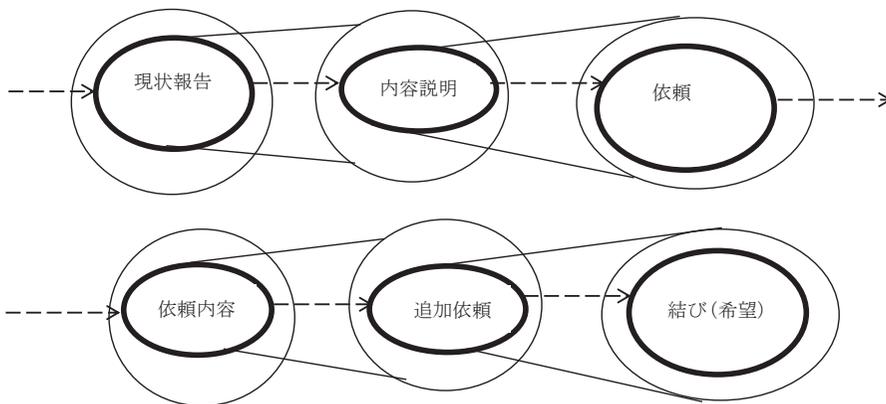


図7 電子メールの焦点構造

文脈としては、ある従業員への「毎月の売り上げ報告」である。まず従業員に、売り上げの現状を報告している。次に内容説明がなされ、その従業員に依頼を行い、その依頼内容が説明される。このメール文面で重要であるところは、副詞表現の使用法である。具体的には、Nevertheless と In addition の使用である。Nevertheless は逆説を表すため、その直前の内容よりも重要であることが直後に説明されると類推することができる。また、In addition では、直前と類似の内容、ここでは「依頼」が追加されることが予測可能である。最後に、依頼（希望）表現、I want you to ～や I would like to が使用されることでメール全体が「依頼」の内容であることがわかる。

以上の議論をまとめると、テキストメッセージや電子メールは以下の依頼構文として提示される。

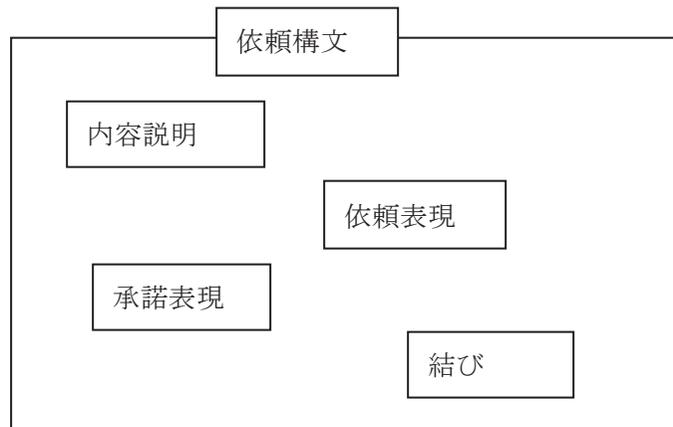


図8 依頼構文

表現の出現順番は多少の違いはあるが、上記の順番で現れ、「依頼表現」や「承諾表現」は典型的な表現が使われることが多いと言える。

V 英語教育からの視点

本節では、これまで述べてきたことが、昨今、特に英語教育で強調されていることに応用可能であることを述べる。

中学校学習指導要領の第2章第9節外国語3. 指導計画の作成と内容の取扱いには、次のように書かれてある。

「キ 生徒の実態や教材の内容などに応じて、コンピュータや情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用したり、ネイティブ・スピーカーなどの協力を得たりなどすること。また、ペアワーク、グループワークなどの学習形態を適宜工夫すること。」

(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/gai.htm)

新学習指導要領では、「話すこと」が「話すこと（やり取り）」と「話すこと（発表）」の2つになる。その中で、ペアワーク、グループワークやアクティブラーニングが重要視されるようになる。

また、文部科学省教員養成部会（第98回）の配付資料「資料6-1 外国語（英語）コアカリキュラム案」には、中・高等学校教員養成課程 外国語（英語）コアカリキュラム案として、[2] 英語科に関する専門的事項1. 英語コミュニケーションの到達目標には次のように書かれてある。

◇到達目標

- 1) 様々なジャンルや話題の英語を聞いて、目的に応じて情報や考えなどを理解することができる。
- 2) 様々なジャンルや話題の英語を読んで、目的に応じて情報や考えなどを理解することができる。
- 3) 様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと（やり取り・発表）ができる。
- 4) 様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で書くことができる。
- 5) 複数の領域を統合した言語活動を遂行することができる。

(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/attach/1388110.htm)

さらに J-POSTL の本稿と関連する個所には、次のように書かれてある。

教科書以外の素材（文学作品，新聞，ウェブサイトなど）から，学習者のニーズに応じたリスニングとリーディングの教材を選択できる。

1. 学習者の年齢，興味・関心，英語力に適した教科書や教材を選択できる。
2. 学習者の英語力に適した文章や言語活動を教科書から選択できる。
3. 教科書以外の素材（文学作品，新聞，ウェブサイトなど）から，学習者のニーズに応じたリスニングとリーディングの教材を選択できる。
4. 教科書付属の教師用指導書や補助教材にあるアイデア，指導案，教材を利用できる。
5. 学習者に適切な教材や活動を考案できる。

(p. 42)

上記より、現在の英語教職教育では、生徒に自分で調べ、アクティブラーニングができるように教授者が仕向けるようにすることが重要視されていることがわかる。本稿の観点から言えば、例えば、学生に TOEIC® L & R の問題を配布し、テキストメッセージや電子メールを一つのフレーム（構文）として、そこに出現する副詞や決まった表現に注意させながら、協同で図視させ、その妥当性を話し合わせる、というアクティブラーニングが可能と考えられる。

VI 結語

本稿では、認知言語学、特に「構文」という概念をもとに、TOEIC® L & R 形式の一部の問題に現れる談話を分析した。第1に、Reading パートに出題される長文はフレームとなる構文を理解することが重要であり、それを認知言語学の焦点連鎖を用いて図示した。第2に、その作成法が現在盛んに行われているアクティブラーニングにも応用できることを示した。そして第3に、J-POSTLE や学習指導要領で提示されている目標に、本稿の手法が合致することを示した。

最後に、山梨（2009：264）が、「認知言語学の視点からみた場合、日常言語の文法は、語彙レベルであれ、句レベル、文レベルであれ、形式と意味の慣習的な関係から成るゲシュタルト的な構成体の複合ネットワークとして規定される」と述べているが、本稿はこの考え方に沿い、談話レベルでの構文を提示したと言えるのである。

参考文献

- De Knop, Sabine and Gaëtanelle Gilquin, *Applied Construction Grammar*, De Gruyter, 2016.
- Fillmore, Charles J., "The Case for Case Reopened," in *Syntax and Semantics 8 : Grammatical Relations*, ed. P. Cole, 59-81, Academic Press, 1977.
- Fillmore, Charles J., "Frame Semantics", in *Linguistics in the Morning Calm*, ed. The Linguistic Society of Korea, Seoul, Hanshin Publishing Co., 1982.
- ガンバーズ, ジョン著, 井上逸兵, 出原健一, 花崎美紀, 荒木瑞夫, 多々良直弘訳『認知と相互行為の社会言語学：ディスコース・ストラテジー』, 松柏社, 2004.
- (原書：Gumperz, John J., *Discourse Strategies*, Cambridge University Press, 1982.)
- Goldberg, Adele, *Constructions at Work : The Nature of Generalization in Language*, Oxford University Press, 2006.
- ヒルキ, ロバート, デイビッド・セイン『TOEIC® テスト 完全教本 新形式問題対応』研究社, 2016.
- Halliday, M. A. K., and Ruqaiya Hasan, *Cohesion in English*, Longman, 1976.
- 橋内武『ディスコース：談話の織りなす世界』, くろしお出版, 1999.
- Hilpert, Martin, *Construction Grammar and its Application to English*, Edinburgh University Press, 2014.
- JACET 教育問題研究会『Japanese Portfolio for Student Teachers of Languages (J-POSTL)』（『言語教師のポートフォリオ』, JACET 教育問題研究会, 2014.）
- Langacker, Ronald W., *Foundations of Cognitive Grammar : Theoretical Prerequisites*, Vol. 1, Stanford University Press, 1987.
- Langacker, Ronald W., *Grammar and Conceptualization*, Mouton de Gruyter, 1999.
- ラネカー, ロナルド著, 山梨正明監訳, 碓井智子, 大谷直輝, 木原恵美子, 児玉一宏, 中野研一郎, 深田智, 安原和也訳『認知文法論序説』, 研究社, 2011.
- (原書：Langacker, Ronald W., *Cognitive Grammar : A Basic Introduction*, Oxford University Press, 2008.)
- Labov, William, *Principles of Sociolinguistic Patterns*, University of Pennsylvania Press, 1972.
- 大竹芳夫著, 内田聖二, 八木克正, 安井 泉編『談話のことは1 文をつなぐ』, 研究社, 2016.
- テイラー, ジョン・R・瀬戸賢一『認知文法のエッセンス』大修館, 2008.
- 山梨正明『認知構文論』大修館, 2009.

注

1. 認知言語学の中に含まれる理論として、ラネカーの認知文法がある（テイラー&瀬戸 2008）。
2. 本稿での談話（discourse）は、次の『大辞林』（第3版）意味で用いる。
「【言】〔discourse〕文より大きい言語単位で、あるまとまりをもって展開した文の集合。話されたもの、書かれたものの両者を含む。テキスト。」
談話に非言語コミュニケーションも含むことがある（橋内 1999）。また、言語以外の文化や社会的要素が関与することから「非自律的」と言える。
談話構造は、当然コンテキストが異なれば、異なったものになり、言語が異なれば、構造も異な

- る。例えば、Labov (1972) は narrative (体験談) の構造として、Abstract → Orientation → Complicating Event → Result/Resolution → Coda を上げている。
3. 「構文」の教育への応用は、最近広がりを見せている (De Knop, Sabine & Gaëtanelle Gilquin 2016)。
 4. ここで参考になっているテキストメッセージは、http://www.iibc-global.org/toEIC/test/lr/about/format/sample07_02.html で見ることができる。
 5. 大竹 (2016) は、承諾・承認表現として (特に、ひと呼吸おいてからの表現であるが)、why, yes/why, sure を取り上げている。